

常盤工業会誌

2026年4月

情報学部 新設 工学部 再編

未来を見据えた学びが、動き出す

—山口大学が挑む、新しい学びのかたち—

2026

2

no.
96

— 目 次 —

ご挨拶

会長 古林 隆司（工化49年卒）



会員の皆様には、平素より常盤工業会の活動に対し、格別のご理解と多大なるご支援を賜り、心より御礼申し上げます。

まず、皆様にお知らせがあります。前号「常盤」（95号）で、山田工学部長より詳しく説明されていますが、令和8年4月より、現行の山口大学工学部7学科が「工学部」と「情報学部」の二つの学部に再編され、常盤キャンパスに「情報学部」が誕生することになりました。また、工学部は、「創成工学科」と「建築学科」の2学科体制となります。これを受け、本会では令和7年8月26日に臨時総会を開催し、定款第3条、第4条、第5条を改定し、情報学の発展への寄与、山口大学情報学部の教育活動の支援を追記し、情報学部の学生及び卒業生を本会の構成員とすることとしました。長きにわたって「山口大学工学部同窓会」として活動を行ってまいりましたが、今後は「山口大学工学部・情報学部同窓会」としてさらに幅広く活動を行っていくことになります。どうぞご理解のほどよろしくお願ひいたします。なお、改定された定款につきましては本会ホームページでご確認ください。

さて、本会の事業活動についてですが、今年度、新たに『「山口大学常盤キャンパス学生支援」冠支援金制度』を創設しました。本制度は、企業からの出資により学生を後押しする仕組みで、学生生活のさらなる充実を図り、学生とOB・OGが所属する企業をつなぐ架け橋ともなる制度です。今年度は、年度

途中からの実施ということもあり、支援できる学生は少数でしたが、今後よりよい形を目指し、企業・学生双方にとって意義のある制度として定着させていきたいと考えております。卒業生の皆様の企業や団体においてもご協力いただければ大変ありがとうございます。

恒例行事となりましたが、本会では会員皆様の知的好奇心や専門性の維持・向上のため「常盤アドバンスドレクチャー」を年2回（春と秋）対面とZoom配信のハイブリット形式で開催しています。全国どこからでも気軽に参加いただけますので、ぜひご活用ください。今号では令和7年度の春講演の報告記事を掲載しておりますのでご覧ください。

令和6年度より開始しました常盤工業会会館の外壁修繕工事ですが、本年度も引き続き工事を進め、道路側の壁面の約3分の2の修繕が完了し、ホワイトを基調としたすっきりとした外観へと生まれ変わりつつあります。残る部分につきましては、次年度に実施する予定です。近くにお越しの際は、ぜひお立ち寄りください。

本会は、これからも会員の皆様にとって価値ある同窓会を目指し、様々な活動を推進してまいりますので、引き続きご理解とご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。また、皆様からのご要望やご提案等も、活動の充実に向けた大切な指針となりますので、ぜひ率直なご意見をお寄せいただければ幸いです。

最後になりましたが、会員の皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げ、ご挨拶といたします。

（令和7年10月記）

常盤アドバンスドレクチャー －未来を切り開く技術開発－2025 第1回講座開催報告

第1回講座「工学で核酸医薬を切り開く」

講 師：赤田 倫治先生

(山口大学工学部応用化学科教授)

開催日：令和7年5月31日



今回は「工学で核酸医薬を切り開く」という題目で山口大学工学部の遺伝子工学の第一人者である赤田倫治先生に講演をしていただきました。赤田先生は生物工学の教員として山口大学工学部に赴任してから30年にわたり、工学部の研究や教育にご尽力いただきました。今年度でご退職を迎えるにあたり、これまでの研究の変遷を交えながら現在の最先端の研究についてご講演いただきました。元々はお酒の酵母の研究をされていましたが、新しい核酸医薬技術開発と事業化のためのベンチャー起業へと展開し、これから工学で医薬の未来を切り開くという熱い想いを語っていただきました。また、講演時期はNHKの朝の連続ドラマにて「やなせたかしとその妻・小松暢（こまつのぶ）」をモデルとした『あんぱん』が放送されており、その中で印象的なセリフを引用しながらご自身の研究を分かりやすく説明していただきました（あんぱん＝パン酵母という繋がりがあったかと存じます）。以下、簡単に当日の講演内容を時系列にあわせ、かつ本執筆者の知見も織り交ぜてご報告いたします。

1. 学生 / 助手時代の研究（広島大学）

赤田先生は岡山県のご出身で、実家が酪農をしていたこともあり、幼少期の「動物と話をしたい」という想いから、生命に関する研究を志すようになったというお話がありました。赤田先生が生まれる10年ほど前の1953年にアメリカの遺伝学者であるアルフレッド・ハーシーとマーサ・チェイスによって「遺伝物質はタンパク質ではなくDNAである」ことが証明され、この発明をした両名は「ウイルスの複製機構と遺伝的構造に関する発見」の功績から、1969年にノーベル生理学・医学賞を受賞し、日本においても遺伝子に関する研究が盛んになっていた時期だったと説明がありました。このような背景があり、広島大学理学部生物学科に入学された赤田先生は纖毛虫のユープロテスに関する研究を卒業論文のテーマとされました（当時の研究室では分子生物学が学べなかつたことやマウスの動物実験（殺生）が苦手という理由もあり単細胞生物の実験をする研究室を選んだそうです）。その研究室ゼミで「酵母菌が性フェロモンの遺伝子を使って交配する研究」に関心を持ち、広島大学大学院工学研究科に進学し、遺伝子研究に長けていた研究室に所属しました。そこでは、特定の酵母の性フェロモンの構造解明に関する研究に取り組み、修了後は広島大学遺伝子実験施設の助手に着任、その後、バーモンド大学にポスドクとして遺伝子工学に関する研究留学をされました。研究留学先ではヒトの癌モデルとして酵母を用いた研究の知識やスキルを習得され、帰国後は本大学工学部に赴任されました。

2. 山口大学時代の研究『酵母の遺伝子を操る』～絶望の隣はにや、希望じゃ！

赴任当時は、遺伝子工学に関する研究設備や関係者もない状態で工学部として何をするか非常に苦悩されたそうですが、一から「酒酵母の遺伝子工学」を始められました。1990年代後半頃から遺伝子除去技術が確立し、タンパク質からなる特殊な「はさみ」によって不要な遺伝子のみを除去することができるようになりました。特に2012年に登場したCRISPR/Cas9（クリスパー・キャスナイン）という第3世代の『はさみ』は原理的にはDNA配列のどんな場所でも簡単に狙って切れる特性があり、ゲノム編集技術として一気に注目されるようになりました。この発明は後にノーベル化学賞を受賞しています（2020年にエマニュエル・シャルパンティ教授とジェニファー・ダウドナ教授が受賞）。

赤田先生も山口県産業技術センターと連携し、このようなゲノム編集技術を酒酵母にも応用し酒の香気成分をより品質の高いものに昇華した『組み換え清酒酵母』を世界で初めて開発し、実用化しました。赤田先生が考える「工学部=応用研究」の形を体現した1つの成果となっています。

3. ベンチャー化への道『頼まれたら断らない精神』～なんのために生まれて、なにをして生きるのか

その後は、ビール会社など多くの企業との共同研究を断ることなく精力的に実施し、県内の食品製造機械メーカーである(株)ヤナギヤ(宇都市)と画期的な装置の開発に成功しました。正確な温度管理を実現することで、これまで困難であった「核酸の1種であるDNAの特定の領域をポリメラーゼ連鎖反応（PCR）で增幅させる技術の大容量化」（大容量PCR技術）を開発しました。当時はコロナ感染症

が大流行し、世界的に大きな被害が出る中、検査キットやワクチンの不足が問題となっていました。この大容量技術があれば、短時間での検査やコロナワクチンの増産が可能となります（2時間で10億倍）。現在もその容量アップを行い、実用化を進めています。さらに、大容量PCR技術を活かして2023年に「ヘリックスエクステンション株式会社」を山口大学発のバイオベンチャー企業として起ち上げました。

近年では2023年にノーベル生理学・医学賞で脚光を浴びたmRNA（メッセンジャーRNA）ワクチン（補足1）のような核酸医薬品が注目されている一方で、その原料となるプラスミドDNAは大腸菌培養によって増殖させ精製する必要があり高コストが課題でした。そこで、赤田先生は大腸菌ではなく「酵素反応」によってDNAを安価かつ高速に製造する方法を開発し、核酸医薬品市場に目下挑戦しているそうです。

（補足1）mRNAワクチンは、ウイルスのタンパク質をつくる設計図にあたる遺伝情報（mRNA）を注射し、抗体产生および細胞性免疫（T細胞応答）を誘導することで免疫を獲得する、新しいタイプのワクチンのこと。出典：厚生労働省「新型コロナワクチンQ&A」

4. 最後に～『あんぱん』からの共通点

赤田先生の講演の中で、心に残った言葉として「絶望の隣はにや、希望じゃ！」「なんのために生まれて、なにをして生きるのか」がありました。これはNHKの朝ドラ『あんぱん』から発せられたセリフたちになりますが、赤田先生の研究人生を物語るにふさわしい言葉であると感じました。

「思いどおりにいかない日々。それでも、必死に全力で進むしかない。その先に未来の灯があるのであるのだから。」

同じ研究者として、感銘を受けることが多い講演でした。勇気と希望が詰まった『あんぱん』を社会に渡せる研究者になりたいと思います。

[報告：第1回担当 山吹一大（応化H15）]

ご挨拶

工学部だより

山口大学評議員・工学教育研究センター長（機械工学科教授）三上 真人



常盤工業会会員の皆様におかれましては、益々ご健勝のこととお喜び申し上げます。また、平素より工学部の活動に対しまして格別のご理解と多大なるご支援を賜り、心よりお礼申し上げます。

2024年10月に機械関東常盤会総会に参加させていただいた際に、最近の常盤キャンパスの様子について写真を用いて紹介させていただきました。在学当時との違いに興味を持っていただき、ぜひ常盤キャンパスにまた訪れたい！との声を多くいただきました。そこで本稿では、近年グレードアップされてきたキャンパスの様子についてご紹介します。

ここ数年で、常盤キャンパス内で学生たちがくつろげるスペースや、自習や自由な活動などで使用できるスペースが増え、快適性が増したと感じています。

図1は福利厚生棟内の生協SHOP横のスペースで、奥には焼きたてパンのお店FAVO BAKERYがあります。このスペースと屋外のテーブルでは、学生たちが飲食しながら談笑したり、自習をしたりしています。屋外のスペースも含めてネーミングライツにより「Area C」と呼ばれております。「常盤」91号の「工学部だより」にて鶴先生が紹介されていますので、すでにご存知かと思います。

図2は図書館に併設された図書館caféのFAVOです。ドリンク、スイーツ、サンドイッチなど軽食が提供され、ここも人気のくつろぎスペースです。キャンパスにお越しの際は



図1 福利厚生棟内外くつろぎスペース
Area C と FAVO BAKERY

ぜひお立ち寄りください。

図3は図書館内に設けられたアカデミックフォレストと呼ばれる活動用スペースです。隣接するFAVO caféとの壁を開放することで、さらに広い空間を作り出すこともできます。図3は、開放的な空間を活かしてオープンキャンパスにてメタバース留学（「常盤」90号「工学部だより」参照）の体験を行っている様子です。

図4は図書館・FAVO caféとArea Cの間に位置するICT基盤センター1階に設け



図2 図書館 café FAVO



図3 図書館内のアカデミックフォレスト

られたラーニングラボです。こちらも「常盤」91号にて鶴先生が紹介されています。現在は主に英語のアクティブラーニングや建設系VR体験に使用されていますが、今後、学生の自由な活動の場として、より広く活用されることを期待しています。

今後このようなくつろぎスペース、自由活動用スペースがキャンパスの中に増えることで、より快適なキャンパスとなると考えます。

上記の他にも、2025年1月に東門横のキャンパス敷地内にコンビニエンスストアがオー

プンし、校内にネーミングライツによる名称を付与した場所や建物も広がりつつあるなど(図5)、さらに少しづつ進化しつつあります。

2026年度には、工学部が再編され生まれ変わり、情報学部が新設されます。これに伴い、常盤キャンパスでは現在情報学部の建物を建設中です。ぜひ、卒業生の皆さんも気軽に常盤キャンパスをご訪問いただき、在学時と比べてどこが進化したか見つけていただけますと幸いです。



図4 ラーニングラボ



図5 ネーミングライツの広がり
(YKC ラウンジ (上)、TOA 講義棟 (下))

情報学部新設について

知能情報工学科教授 多田村克己



常盤工業会会員の皆様におかれましては、ますますご清祥のこととお喜び申し上げます。前号「常盤」95号において山田工学部長より2026年4月に

現行の工学部7学科を工学部2学科と情報学部に再編する計画の概要についてご紹介いたしましたが、2025年7月末に文部科学省より工学部改組と情報学部新設が認可されました。本稿では、大学院創成科学研究科博士前期課程における高度情報専門人材育成機能強化の取り組みおよび情報学部の新設の概要についてご説明申し上げます。

経済産業省が2019年に発表した「IT人材需給に関する調査」¹⁾において、先端IT人材（IoT及びAIを活用したITサービスの市場に従事する人材）需要の伸びが中位シナリオで推移した場合、2030年には約45万人

の不足が見込まれるという衝撃的な予測が出されました。この課題の解決に向けて様々な施策が実施される中で、文部科学省では、「大学・高専機能強化支援事業（成長分野をけん引する大学・高専の機能強化に向けた基金）」事業の募集が2023年度から開始され、その中に「高度情報専門人材の確保に向けた機能強化」事業²⁾があります。これは、我が国の先端IT人材養成を支える情報系大学院の定員増を伴う体制強化を計画する国公私立大学・高専の支援を目的とするもので、最高10億円程度まで最長10年間の補助が実施されます。山田学部長からの寄稿にもありましたとおり、本学からは昨年度「Society5.0をけん引するしなやかな高度情報専門人材育成強化」という事業計画名で応募し採択され、2024年度から2033年度までの10年間で7億4,500万円の助成を受ける予定です。この計画では、2026年度に情報学部を新設し、2028年度に大学院創成科学研究科に情報学

情報学部 情報学科
入学定員 120名 編入定員 10名 収容定員 500名



図1 情報学部カリキュラムの概要

専攻（仮称）を設置した後、情報学部1期生が進学する2030年度に定員を増員する予定です。最終的には、情報学部は入学定員120名、編入定員10名で収容定員500名、情報学専攻（仮称）は入学定員83名で収容定員166名の陣容になる予定です。

図1は、新設される情報学部におけるカリキュラムの概要を示したもので、情報学部では情報学の知識と技能に関して広さと深さを兼ね備えた先端IT人材の養成を目的とします。その実現のため、システム情報学、知能情報学、空間情報学、および人間情報学の4つの専門分野に対応した4つの教育コースを設けます。すべての学生が4分野の基礎を学ぶことで情報学に関する幅広い知識と技能を身につけることを可能とともに、各コース毎に設定された履修モデルに従い修学することにより深い専門性を身につけることも可能とするカリキュラム構成についています。入学後の低学年次では、情報学の基盤である数学の基礎的な能力、および自らのアイデアを形にするための道具となるプログラミング能力をしっかりと鍛えつつ、計算機科学やデータサイエンスの基礎を学び情報技術者としての基盤となる知識と技能を育成する科目構成としています。そして、2年次後期にコースを選択しますが、コース関連必修科目の設定を最小限に抑えることで、選択コース以外のコースの開講科目を幅広く学べるようになり、複合的な知識を育成します。図2は、それぞれのコースで養成する人材像と学習内容を表しています。4コースの中で、「ジオ・インテリジェンスコース」は、国内情報系学科の中でも非常にユニークなコースであり、地理空間情報に関する専門知識と宇宙利用技術に関する専門知識を修得できるカリキュラムを提供いたします。

日常生活における「情報および情報技術」

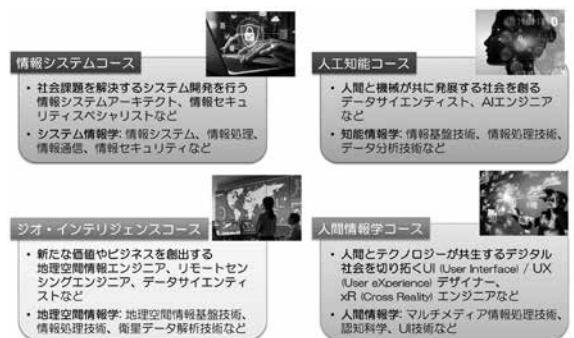


図2 各コースで養成する人材像と学習内容

の関与は拡大する一方であり、社会の中核的な存在になりつつあります。また、情報関連産業における価値創造の中心が、ハードウェアの物理的なスペックから消費者が受けるサービスや体験へと移行しつつあります。このような「情報」を取り巻く環境の変化に対応した先端IT人材の養成を実現するためには、文系理系の枠を超えて多様な資質を有する学生を受け入れる必要があると考えられます。このため、情報学部では従来の理系型に加えて文系型の受験科目構成を用意し、さらに文系型・理系型ごとに定員を置かず一括で選抜するように、入学者選抜方法を大きく変革いたしました。

本稿では、2026年度新設される情報学部の概要を中心に先端IT人材養成のための新しい取り組みについて説明いたしました。なお、本稿で紹介いたしました大学院改組に関する内容は計画中であり今後変更になる可能性がありますことを申し添えます。

新設される情報学部にご期待いただくとともに、工学部同様のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

- 1) 経済産業省、IT人材需給に関する調査（概要）、https://www.meti.go.jp/policy/it_policy/jinzai/gaiyou.pdf, (2025.10.20 アクセス)
- 2) 文部科学省、成長分野をけん引する大学・高専の機能強化に向けた基金による継続的支援、https://www.mext.go.jp/content/20230721-mxt_senmon01-74.pdf, (2025.10.20 アクセス) .

新任教員紹介

三島 智和

電気電子工学科教授
(R7.5.1 赴任)



令和7年5月1日付で電気電子工学科の教授として着任しました三島智和（みしまともかず）と申します。前職は神戸大学准教授ですが、教職のキャリア・スタート地点としては中国地区の工業高専に勤めておりました。高専勤務時代には共同研究という形で、本学電気電子工学科の先生方と交流があり、常盤キャンパスには何度も足を運んでいました。そのような折、新たな教育研究活動の拠点が本学部ということになり、どこか懐かしさを感じつつ意義深いものを感じております。

専門は電力工学・パワーエレクトロニクス（半導体電力変換工学）で、産業・電力・輸送交通・情報通信・エレクトロニクス・福祉医療など電力や電気エネルギーの有効利活用には欠かせない電源および電動力応用機器・システムについて実用的観点から研究を行っ

ています。教育面では、ハードウェアの設計の作り込みと実際の応用を意識した実践的なシステム構成を構築するための専門知識や技能の習得に力を入れ、電力産業を背負って立つ優秀な人材の育成に注力してきました。

本学着任後は、これまでの教育研究活動を活かし、より一層発展させるべく尽力しております。また、本学にて創出した研究成果をもとに設立したスタートアップ会社では、実製品化による社会実装を目指しています。

山口県は半導体産業や重工業が盛んな地で、周辺にも関連企業が集積しており、広島県、北部九州との間で重要な役割を担っています。このような環境の中、先端的な研究や人材育成も含めた教育活動にしっかりと取り組み、山口大学工学部が特徴ある大学として発展を続けていくために尽力していきたいと考えています。どうぞよろしくお願ひいたします。

教員の異動

【転出】

(令和7年7月31日付辞職)

Du Xin (電気電子工学科助教)

「常盤工業会奨学金」について

「常盤工業会奨学金」は、常盤工業会から工学部への寄付金により設置されているもので、返還を必要としない給付型の奨学金です。詳細につきましては山口大学工学部ホームページを参照、あるいは工学部学務課にお問合せください。

山口大学工学部学務課

TEL 0836-85-9011

韓国・忠北大学との第8回ジョイントセミナーを開催しました

国際交流支援室長（感性デザイン工学科教授）宋 俊煥



7月28日（月）から30日（水）までの日程で、韓国の忠北大学工学部及び電気情報学部の代表団を本学に迎え、ジョイントセミナーを開催しました。

本学工学部と忠北大学の交流の歴史は長く、2001年の学部間国際交流協定締結を経て、2016年には大学間国際交流協定へと発展しました。2014年からは毎年ジョイントセミナーを開催しており、共同研究の可能性を模索するとともに、若手教員を中心とした交流の拡大、学生の留学促進を図っています。

今回の訪問には、忠北大学から工学部のウォン・ジョンファン副学部長と電気情報学部のカン・ムンヒ副学部長をはじめ、キム・ミヘ教授、リー・ハクソン准教授、リム・ボギュ助教、ビヨン・アヨン助教が来日されました。本学からは、山田陽一工学部長、鶴心治副学部長、三上真人評議員、国際交流支援室委員等が代表団を迎えるました。

一行は、滞在初日の7月28日（月）午後に谷澤学長を表敬訪問し、懇談を行いました。懇談では、これまでの両大学の連携や今後の



展望について話し合われ、双方の革新的な教育プログラムについても議論が交わされました。特に、忠北大学からは、本学のDX人材の育成や分野横断型の教育が特徴的な「ひと・まち未来共創学環」の取り組みに高い関心が寄せられ、活発な意見交換が行われました。また、忠北大学からは、韓国国内で導入が進められている入学後に専攻を決定する革新的な学生募集制度について紹介がありました。

翌29日（火）には、常盤キャンパスの「志」イノベーション道場にてジョイントセミナーが実施され、両大学の研究者が研究発表を行い、活発な質疑応答が交わされました。セミナー後には昼食懇談会やキャンパスツアーが開催され、一層の交流を深めることができました。



今回のセミナーは、両大学間の既存の強固な学術交流を再確認するとともに、教職員や学生の交流、共同研究の可能性を探り、互いの革新的な教育プログラムから学ぶ貴重な機会となりました。忠北大学との継続的な連携を通じて、今後も国際的な学術交流と教育の発展に貢献してまいりたいと思います。

リモートセンシング技術を用いた河川観測手法に関する研究紹介

社会建設工学科助教 大中 臨 (M建環R3年修了)



川は時々刻々とその様態を変えながら私たちの生活に必要不可欠な淡水などの資源を提供し、流域内の生き物の命をはぐくんでいる。一方、豪雨が降った時にはその様態を大きく変え、時に災害となって私たちの生命や財産を脅かすこともある。

私は学生時代、山口や広島で発生した豪雨災害の復興ボランティアの中で、あって当然と認識していた生活が突如として失われる光景を目の当たりにして、防災、なかでも豪雨対策の重要性を痛感した。また当初、私にとって河川はあまり身近なものではなかったが、山口大学の研究室に所属してから現地河川でのデータ取得、生き物の観測、そのデータを使った統計解析やシミュレーションを行う中で河川の魅力を知り、防災だけでなく環境の保全・創出も重要な取り組みであり、「治水と環境の調和した河川管理をどのように実現すればよいか」が研究生活の大きな問い合わせとなつた。そのような治水と環境の両視点と学生時代から続く河川を対象とした研究生生活の中で、理論だけでなく観測の重要さを実感している。若輩者である私が記述するのも恐縮であるが、ここでは河川環境の観測技術とその応用に関連した研究をご紹介する。

河川観測の重要性

生活の気づいた所でふと河川を見たときは一見前に見た時と何の変化もないように見える人もいるかもしれない。しかし、場所や出水などのイベントで変化の勾配は違うもの

の、河川内の物理環境（地形や水温など）や生き物の分布は、季節の移り変わりに伴って連續的に変化している。河川環境を守り、川が提供する自然の恵みを享受しつつ、災害から命を守るためにには、川をよく観察して、水や土砂、生き物などの動きを把握し、これからの変化を予測した上で管理計画を立てる必要がある。しかし、水環境内では重みは異なれど非常に多くの環境要因が相互に関連しあいながら変化しているため高精度な予測は容易ではなく、理論式と経験式を組み合わせて河川管理のための解析が行われる。実河川の地形や水位などは経験式の整備やシミュレーションの初期・境界条件、構造物設計の基礎情報として不可欠であり、観測なくして管理は成り立たない。

リモートセンシング技術を用いた河川観測

川の観測に関して、従来は人が直接河川内に立ち入る方法が主流であったが、人の立ち入れる領域に制限がある河川では、観測に多大な労力を要する場合が多い。そのため、一級河川であっても河川地形の計測などは5年に一度、縦断方向に200 m間隔の空間解像度で行われていた。しかし、激甚化する豪雨に伴い、地形の変動も活発になっているため、従来の観測方法では十分な管理が困難になることが予測される。それは地形だけでなく、生き物や粒度分布なども同じであり、高水準の河川管理には時空間解像度の高い観測手法が求められる。そこで近年は UAV や衛星などリモートセンシング技術が注目されている。リモートセンシング技術を用いることで調査の労力が大幅に削減されるだけでなく、これまで点として把握していた物理量を面的

に把握できるため、河川管理上大きなメリットがある。実際、公共測量では ALB による高解像度地形取得が主流となりつつある¹⁾。また、UAV のマルチスペクトルで水温分布から湧水箇所抽出の可能性が示され²⁾、著者らも 2019 年西日本豪雨の瀬越地区で発生した土石流と河川氾濫の複合災害に関して、UAV を用いて災害前後の地形を把握し、当該データを初期条件とした氾濫解析および踏査を統合して、土石流によって供給された土砂・流木によって河川氾濫が発生したことを明らかにした³⁾。この検討は災害前後の地形データがなければ検討し得ないものであったが、2 級河川支川の上流域に位置する本地点で河川地形データは公開されていなかったため、UAV を活用した地形観測技術が活きた研究事例であった。衛星画像に関する河川管理に活用するための検討がなされており、著者らも 8 バンドの波長を 2m の解像度で捉えられる衛星画像を用いることで、水域や流下能力を阻害する植生が繁茂している領域などを包括的に知るための検討を行い、高い精度で地被を分類できることも示した⁴⁾。このようにリモートセンシング技術を用いた観測技術は河川管理上高い有用性が確認されており、今後ますますの発展が見込まれる。

これからの研究展開について

近年は、河川の粒度分布の把握に UAV と機械学習を適用する研究を進めている。粒度分布は、河川の粗度や河床変動量に影響を及ぼすだけでなく、アユの産卵場所や底生動物の生息環境など、環境面でも大きな役割があり、河川管理上重要な物理パラメータである。しかし、その調査には多大な労力を要するため、公開されているデータの時空間解像度は地形データよりも粗い。それらがリモートセンシング技術によって高時空間解像度に入手できれば、効果的な環境保全・治水対策

に大きく寄与する。著者らは、水上・空中両用ドローンを用いて、河川内に立ち入らずに河川水面下の粒度分布の推定を行う手法 (WADPSM 法) を検討し⁵⁾、従来手法 (面積格子法) と変わらない精度で粒度分布を把握できる可能性を示した (図 1)。現在は本手法に機械学習を適用する準備のため、定期的に手動で河床を掘削しているが 1 地点で 5 時間を要するなどその労力の多さを実感している。データを蓄積し、効率的な観測手法の開発・検討に繋げたい。

河川現地調査と十分な解析が実施できる環境は、県内には山口大学にしかなく、ここで学び、学位を取得し、今日まで研究が続けられていることに感謝が堪えない。また、同学科の先生方も非常に相談しやすく、研究活動を推進できる環境である。指導学生は頼もし共同研究者であり、これからも共に河川に赴き、知り、正しく管理するための検討を進められることに大きな期待を膨らませている。

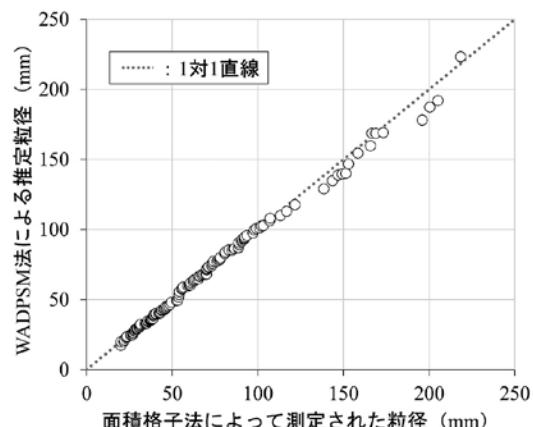


図 1 粒度分布計測結果（従来手法との比較）

参考文献

- 1) 国土交通省国土地理院：航空レーザー測深機を用いた公共測量マニュアル(案), 2019.
- 2) 泉野ら (2025), 河川技術論文集, 第31巻, pp.49-54.
- 3) 大中ら (2019), 土木学会論文集B1(水工学), Vol.75, No.1, pp.260-269.
- 4) 江口ら (2023), 河川技術論文集, 第29巻, pp.13-18.
- 5) 大中ら (2023), 河川技術論文集, 第29巻, pp.97-102.

留学生として日本に来て

博士前期課程化学系専攻2年 Ahmet BOLAT



I am Ahmet Bolat, a 25-year-old student from Turkey. I came to Japan to pursue my master's degree at the Environmental Chemistry and Chemical Engineering Department, Graduate School of Science and Technology for Innovation, Yamaguchi University.

I was born in a small city in Turkey called İğdır. Since my father was a government employee, my family had to move frequently, and I lived in several different cities in Turkey.

Since high school, I have been studying away from my family in order to pursue better educational opportunities. As a result, I became accustomed to living apart from them, though it has never been easy.

My interest in Japan began during my high school years, mainly through the anime I watched. At that time, I even learned a bit of the Japanese alphabet. However, since my only motivation was anime, my studies did not last long.

During my bachelor's degree in Turkey, I had opportunities to meet people with connections to Japan, which reignited my curiosity. I began learning more about Japanese culture and strongly wished to experience it first-hand. I applied for the Japanese Government Scholarship to pursue my graduate studies in Japan, and when I

was accepted, I was overjoyed.

Now I live in Ube, a small and charming city in Yamaguchi Prefecture. Ube may not have the tourist attractions or conveniences of larger cities, but I would never consider leaving for a big city. I have always wanted to live in a calm place with no tall buildings, little traffic, and fewer crowds, while still having places where I can spend time with friends from time to time.

My weekdays mainly consist of going to the laboratory from 9:30 a.m. to 5:00 p.m. Afterward, I usually spend time hanging out with friends or taking a walk around the city. On weekends, I try to take care of household chores, and on Sundays I play soccer with friends in Ube.

My research mainly focuses on green energy production using seawater and river water through a process called reverse electrodialysis. I am investigating ways to improve the performance of this system.

During national holidays or lab breaks, I enjoy traveling around Japan. So far, I have visited many famous places in Yamaguchi Prefecture, such as Motonosumi Shrine, Akiyoshidō Cave, and Hinoyama Park. Outside of Yamaguchi, I have been to Fukuoka, Hiroshima, Nagoya, Nagano, and Tokyo. I especially enjoy visiting nature spots and historical sites, with a particular interest in castles. My most memorable visits so far have been to Nagoya Castle and Inuyama Castle. I recently learned that



there are twelve original castles in Japan, and Inuyama Castle is one of them. Before leaving Japan, I hope to visit all twelve. I also dream of visiting Kyoto for its temples and scenery, as well as Hokkaido in winter to experience its famous cold climate.

I also love trying local foods wherever I travel. Japanese cuisine has been an



amazing experience for me, offering flavors I could never find in Turkey. My favorite dish so far is sushi, which is why I regularly visit my favorite sushi restaurant, Sushirō. As for regional specialties, I especially enjoyed tenmusu in Nagoya, a bite-sized rice ball with shrimp tempura inside, wrapped in seaweed, similar to onigiri. If I have the chance to return to Nagoya, I would definitely like to eat it again.

I have already made so many memories in Japan, and I hope to create many more during my time here. Living in Ube and exploring different parts of Japan has not only given me unforgettable experiences but also helped me grow as a person. I look forward to continuing my research, deepening my understanding of Japanese culture, and building friendships that I will carry with me long after I return to Turkey.



学生のプロジェクト活動を支援します

常盤工業会では、山口大学工学部学生が主体的に取り組む活動（山口大学工学部を内外にアピールできるもの、地域貢献性のあるもの）に対し、財政的な支援を行っています。興味のある方はぜひ、常盤工業会事務局までご連絡ください。

常盤工業会事務局 TEL 0836-32-7599

Japan Steel Bridge Competition2025 (JSBC2025) 参加に際して

社会建設工学科4年 伊藤 陽太



【JSBC とは】

JSBC は、全国の高専生・大学生が参加する「学生鋼橋模型製作コンペティション」で 2025 年度は 9 月 4 日から 6 日にかけて 3 日間行われました。参加校（22 チーム）は鋼橋の模型を自ら設計・製作し、大会当日に実際に組み立て（架設）て性能を競います。審査は構造部門（強度・たわみなど）、架設部門（施工スピード・安全性）、美観部門（デザイン性）、プレゼン部門（伝える力）と 4 つの部門で行われ、最終的にそれらを考慮した総合部門として順位が決まります。実務的な知識を学ぶ貴重な機会です。

【大会までの流れ】

本大会には麻生研究室の博士前期課程 1 年の 2 人、学部 4 年の 4 人で参加し、当研究室は今年で 7 回目の出場になります。4 月にルールブックが公開され、そのルールに基づいてチーム全員が設計案を出し合いました。5 月から解析ソフトを用いて全設計案の構造解析を行い、たわみが目標値となるように修正していきました。7 月に鋼材を発注し、製作（削孔・溶接・塗装）を開始しました。製

作作業では、鋼材に穴をあける位置の手違い、溶接ミスや溶接による部材の変形などたくさんのがありました。この真夏の屋内での作業を乗り越えて、ついに 8 月 19 日に鋼橋模型が完成しました。その後、載荷試験を行い、崩壊（座屈）しないか、たわみ量はどうかなど橋梁の性能を確認したうえで、架設練習に移りました。最初の架設練習では、部材の接合箇所が分からず、困惑して制限時間である 30 分を超過して 40 分もかかってしまいました。そこから何回も練習を重ね、先輩や先生からアドバイスをいただきながら、次第に架設のスピードは速くなっていき、無事に本番を迎えることができました。



【設計した橋の概要】

山口大学として山口県の魅力を伝えるために長門市の元乃隅神社をテーマとして選びました。連なる鳥居をイメージして赤、周りの海を青、雲を白で塗装し表現しました。橋の名前は響きがカッコよく、連なる鳥居が優勝へ導くようにと“朱天大橋”と命名しました。

【本番の結果】

構造部門では、たわみ量を目標値の範囲内に抑えることができ、総重量も考慮され 1 位

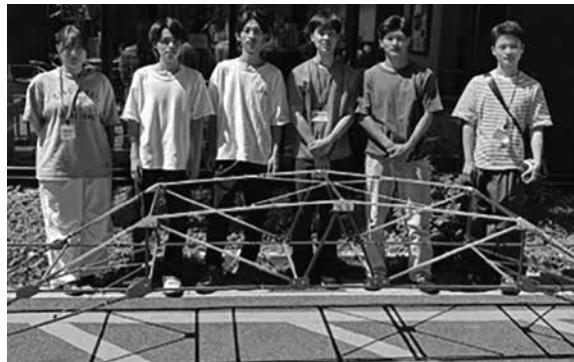
を取ることができました。架設部門では、14分00秒で3位という結果になりました。しかし、1位の福井大学、2位の室蘭工業大学は8分台で壁を感じました。美観、プレゼン部門はともに8位タイという結果になりました。そして、総合部門は22チームのうち2位という、山口大学としては過去一番の好成績を残すことができました。



【感想】

橋梁の構造解析では、たくさんの橋の形で解析しましたが、最初はなかなか良い解析結果が出ず苦労しました。そして、橋梁形式が決まった後の製作段階では、暑い室内で溶接をしました。初めての溶接だったので、失敗

もありましたが、普段できない経験ができて楽しかったです。製作完了後、動画を撮りながら何回も架設練習を行いました。その結果、大会当日の架設時間は練習時に比べ大幅に短縮することができ、練習の成果を出すことができました。自分たちの作った橋梁を持ってコンテストに参加するのは面白くて貴重なよい機会となりました。また、他校や企業との関わりも感じることができた楽しい大会でした。他校の橋梁を見ると、こういう考え方もあるのだなと驚きがたくさんありました。結果としては、僅差で優勝を逃す悔しい結果に終わってしまったので、来年は優勝を目指して頑張りたいです。



日本海水学会 第77年会シンポジウム（ご案内） 海水が拓く持続可能社会－エネルギーと資源循環のフロンティア－

主催：日本海水学会

共催：(公財)ソルト・サイエンス研究財団・日本海水学会西日本支部・

山口大学工学部・(一社)常盤工業会

日時：2026年6月5日（金）9:00～12:10

場所：山口大学工学部 D11教室

▼日本海水
学会HPは
こちら

どなたでも参加可能です。

（参加費無料）

ぜひご参加ください。



地球上に豊富に存在する「海水」は、新たなエネルギーと資源の源として注目を集めています。海水は、膨大な量の水を供給するだけでなく、多様な元素の資源貯蔵庫であり、エネルギー変換、資源循環、環境保全の観点から多面的な可能性を秘めています。海水利用が拓く科学技術のフロンティアの展望についてご講演いただきます。

詳細は日本海水学会ホームページ（行事のご案内－日本海水学会のイベント）をご確認ください。

国民スポーツ大会に出場するまでに

社会建設工学科3年 原 新太郎



【自己紹介】

私は山口大学工学部社会建設工学科3年の原新太郎です。宇部市にある小野湖を拠点とする山口大学ボート部の一員として活動して

います。本稿では国民スポーツ大会(略称「国スポ」・旧「国体」) 参加に至るまでの経緯と国スポについて書かせていただきます。

【国民スポーツ大会出場に至るまで】

私は小学生のころから高校卒業まで野球を続けていましたが、大学では違うスポーツをやってみたいと考えていた中、新歓でボート部と出会いました。とても活気があり面白そうだったので入部することを決めました。

ボート部は部員全員が勝ちたいという気持ちが強く、練習量はどこの部活よりも膨大でした。入部当初は35人いた同期も、厳しい練習についていけない人が増えていき、今では16人と半分になりました。特に1年の冬は、6時に朝練が始まりそのあと大学に行くというとても厳しいスケジュールでした。私も練習の厳しさを理由にどこかのタイミングで辞めたいと思うようになっていました。いつ辞めようかと考えながら練習をしていたのですが、なかなか辞める踏ん切りがつかず、だらだら続けていたときに小さな大会に出場することになりました。とりあえずその大会に出場するまでは頑張ろうと心に決め、練習に取り組みました。ところがその大会が中止になってしまったのです。ここまで頑張ったのに、試合に出場できなかったことが悔しく

て、その日の夜は涙が止まりませんでした。そして、ここで終わるのではなくもっと大きな舞台で、多くの努力をしてきた成果を出して勝ちたいという気持ちが芽生えたのです。そこからは勝つために、どんなにしんどくても練習に食らいついでいき、自主練にも積極的に取り組みました。

2年時の国スポやインカレに出場することは叶いませんでしたが、確実に力がついてきたと感じられるようになりました。そして自分の世代がチームの中心となる2年の9月以降には、私が主力となる1番強いクルー(チーム)として大会に出場することができました。他校の強豪チームとも戦うことができ、表彰されメダルをいただいたこともあります。そして、3年の5月頃に国スポに出るチャンスをつかむことができました。

部活をする前の私は、これといって打ち込んできたものがあるわけでもなく、特別に親しい友人が多かったわけでもなく、どちらかというと淡々と日々を過ごしていたように思います。そのような中、ボート部に出会い、練習を重ね、国スポに出場できるまでになったのです。部活を続けてきたことで、これまでの人生ではできなかった経験をすることができるとても感慨深く感じます。

【国民スポーツ大会ー予選ー】

国スポに出るにはまず県予選を通過し、次に中国ブロックを突破する必要があります。県予選から中国ブロックへ出場できる人数は7人で、選考結果によって県代表として出場する種目が変わってくるというものでした。中国ブロックへの出場者を決めるレースでは

私は7番目のタイムでした。自分としては5番目には入れる力があると思っていたので本当に悔しかったです。しかしながら中国ブロックにつながるレースはできたと思いました。

その後の中国ブロックで、私は「ダブル」(1人2本のオールで2人が漕ぐ)という種目に出場することになりました。この種目は、この大会におけるエキシビション的な意味合いもあり、すべての県のチームに出場権がありました。私が戦う相手は強豪校や実業団選手となり、体格や経験値に差がある中、自分たちは自分たちの漕ぎに徹しようと考えました。結果は5艇中4着でしたがやるべきことはやり切った気持ちでした。

県予選、中国ブロックを経て、山口県としては「ダブル」と「舵手付きフォア」(4人の漕ぎ手と舵を取る1人の計5人が乗る種目)という種目で国スポに出場することが確定しました。私が出場する種目は「舵手付きフォア」となったのですが、補欠としての出場となりました。国スポに出場できることはうれしかったのですが、県の代表で行くからにはやはり試合に出て勝ちたかったという思いが強く、とても悔しかったです。

【国民スポーツ大会】

ボート競技はメジャーなスポーツというわけでもなく競技人口も少ないため、国スポ等の大会では顔見知りが多く、オリンピック選手や有名選手が出場しており、他の競技と比べるととても変わった環境にあります。そのため、有名選手たちの漕ぎを間近に見ることができます。彼らの漕ぎは動きに無駄がなく、「丁寧で美しい」の一言で感動的なものでした。

国スポでの私の役割は選手にアシシデントがあった際の対応と、選手のサポートがメイ

ンでしたが、このようなすばらしい選手たちが競技する国スポという舞台に立てたことで新しい世界を見ることができました。そして自分もここまで成長したのだしみじみ感じました。

部活動として取り組む私たちがオリンピック選手のようにさらに上の世界に行くにはまだ道半ばでこれから多くの努力が必要ということも実感しました。しかし、インカレと今回の国スポを通じて、チームの皆の変わりたい気持ちが大きければ私たちの代では見ることができなかつた世界を見ることができるのではとも感じました。

【最後の大会ーインカレー】

3年生同期のほとんどが最後の大会となる全日本大学大会(インカレ)にも出場することができました。私を含めた同期3人と後輩と4年生の先輩とで「舵手付きフォア」に乗せていただきました。思うような成績は残せず、「勝ちたかった」という気持ちは強く残りましたが、これまで取り組んできたことに悔いはありませんでした。

【ここまでやってきて】

大学でボートをやってきたことは間違ひなかったと思っています。部活動の取り組みにおいては、意見の違い等で周囲に迷惑をかけてしまったことがありましたが、あたたかく見守り、関わり続け、応援してくださった方々に心から感謝したいと思います。

ボート部は3年で引退ということになっているため、私もここで引退となります。大会出場を目指し競技で勝つという目標はなくなるので、これからどうしようかと考えているところですが、一旦休憩して新しい自分の目標を探したいと思っています。

建築学会シャレットワークショップ5泊6日のまちづくりに参加して

博士前期課程建設環境系専攻1年 宮本 拓実

2025年9月3日から9月7日にかけて建築学会主催の「地域まちづくりシャレットワークショップ」が福岡県大牟田市にて開催されました。シャレットワークショップとは、建築や都市を学ぶ全国の学生・専門家が集まり、短期間に集中して街の課題と具体的な解決法を探り、提案を行う活動です。私たちはこのワークショップに参加し、地域住民をはじめまちづくり組織や行政の協力のもとフィールド調査やグループワークをしながら、街歩きや将来像のデザインについて提案を行いました。本稿では、まちづくりワークショップでの提案に至るまでの様子や、取り組みの内容等について紹介したいと思います。

【ワークショップ参加のきっかけ】

これまでに5日間連日で行うワークショップには参加したことがありませんでしたが、短期間でどのように街と関わり、どのように地域活性化へのアプローチをしていくのかを学び、考えたいと思い参加しました。また、異なる環境で過ごしてきた他大学の学生の視点や考え方に対する中で、他の人の視点をも自分のものにして幅広い視点と考え方を持て



建築学会での発表会

るよう成長したいという心構えで臨みました。

【1日目の様子】

1日目は街の印象を掴むため、2時間かけて街歩きをしました。街に詳しい行政職員の方の説明を聞きながら街を歩き、大牟田市の魅力や問題、その解決策などをメモし、頭で整理しながら、こんな場所になってほしいといった理想像やイメージを膨らませていきました。私の感じた大牟田市の魅力は、リノベーションを行った防災学習のできる施設や待合室、カフェなど、家・学校・職場以外の居場所となる施設が街に多くあることでした。これらの施設は、高校生を交えて街に必要な用途を考えて作られたものだそうです。独立して点在しており、連携もしていないため、魅力が十分に活かしきれていないといった課題があるように感じました。

このように各々感じたことをグループ6人で話し合いましたが、皆違った視点を持っていることに気づき面白く感じました。私が課題だと考えたところを逆に魅力として捉えている方もおり、解釈の仕方によって見え方が変わることを改めて学ぶことができました。



街歩きの様子

その後、グループ全員の意見をまとめ、発表して初日の活動を終えました。

【2日目・3日目の様子】

2日目からはテーマ決めを行い、3日目には中間講評会を行いました。その後、それが解決したいと考えている課題やエリアを選び、似た考え方を持つ者同士でグループを組んで、最終日まで将来像のデザインを考えます。私は、大牟田市では駅が街の中心になっていると捉えており、この中心地を上手く活用することで街全体を活性化できるのではないかと、駅にある貨物線路跡地を対象とした提案をしたいと考えました。また、1日目に感じた「独立して点在している魅力ある場所」について駅を中心に繋げられるのではないかとも考えていました。

2日目は、まずは駅周辺の利用者や店舗等、駅についてよく知っている方に直接話を聞くため、現地で2時間ほどヒアリング調査を行いました。その結果、住民の方が考えている課題と私たちが思う課題は同じだとわかりました。また、炭鉱が有名なことやお祭りが賑わっている背景としてこの街の歴史や文化が大きく関わっていること等、私たちが気づけなかった魅力を教えていただきました。その後、ヒアリング調査の内容をまとめ、これを基に構想を練ることにし、宿の大部屋をお借りして、グループで集まり、提案内容を考えました。

翌日3日目は、住民の皆さんに現段階での提案内容を発表しました。ここでは、特に実現性という点について多くの意見をいたしました。私自身はこれまで行ってきた設計演習のように、夢のある提案内容が好ましいと考えていましたが、現実には実現性があるかないかという点が重要視されていることを実感し、後日の作業で意識しようと心がけました。



宿・会場での作業風景

【4日目・5日目の様子】

4日目・5日目は、中間講評会で得た住民の意見や教授の助言から、提案を練り直し、ブラッシュアップを行いました。実現性が強く求められていることがわかったので、まとまり切っていなかった意見を一つの意見にまとめてデザインに落とし込むことにしました。

5日目は、最終講評会を行いましたが、中間講評会と同様多くの意見がありました。実現可能性の面では、数年区切りで第1期、2期、3期、4期とフェーズごとに分けて説明し、20年後の将来像を描いて提案したところ、実現可能性がありそうだという意見をいただきました。中には資金はどこから出るのか、誰が管理するのかといった詳細な質問もありましたが、最終的には「街全体が楽しくなりそうで、住人が楽しく暮らせる居場所ができると感じられる提案だ」と言っていただきました。懸案事項については今後の作品のブラッシュアップに活かしたいと思いました。

【実感した成果】

ワークショップでは、市の職員や組織の方が近くにおられ、地域に密着した形でまちづくりに参加することができました。また、住民や施設の方へのヒアリング等、実際に意見交換や交流をすることで、地域の皆さんに寄り添う形で街づくりに携わることができ、よ

り密なまちづくりの提案をすることができたと実感しました。大学の枠を飛び越え、様々な立場の方から意見をいただく経験が刺激となり、多くの学びを得ることができました。

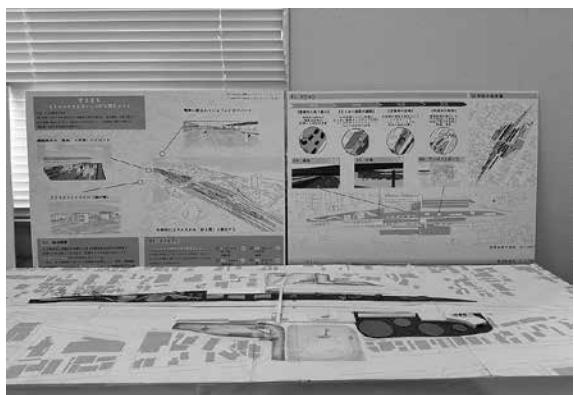
これまでも学部や大学院での設計課題や建築設計コンペにおいて、地域の課題について学生同士で考えながら提案を行ってきました。また、通常のコンペでは夢半分のようなデザインをすることがよくありますが、ワークショップでは実現性が強く求められ、住民の方に楽しいと思っていただける作品を作る必要がありました。地域のリアルな声を聞き、より街に寄り添うという点で、普段とは違ったアプローチで提案を行うというすばらしい体験ができたと思います。今回のまちづくりワークショップで得た学びを、今後の研究活動に活かすとともに、引き続きまちづくりに関わる機会を持ちたいと考え、これからも積極的にワークショップやイベントに参加していきたいと思います。

本稿を通じて、ワークショップの雰囲気

を少しでも感じ取っていただければ幸いです。



講評会の様子



作品 「すきまち」 ボードと模型

宇部にお越しの際は 常盤工業会会館宿泊施設をご利用ください！



宿泊施設（洋室シングルルーム）

冷暖房・バス・トイレ・テレビ完備

宿泊料金

会費納入者 1泊 3,000円

その他 1泊 4,000円

食事について

食事はついていません。

工学部生協学食もご利用いただけます。

工学部正門前にはコンビニもあります。

【申込・問合せ先】

一般社団法人 常盤工業会 事務局

TEL : (0836)32 - 7599 / tokiwa@bc.wakwak.com

「ときわスマートチャレンジ」令和7年度採択団体紹介

「ときわスマートチャレンジ」は、常盤工業会が行っている学生活動支援のひとつです。工学部学生が自由な発想で取り組むプロジェクト活動に対し、財政的支援を行っています。今年度採択された団体の活動内容についてご紹介します。

「プロジェクト R」

代表 小田 貴将さん

(機械工学科 2 年)



概要

高度な技術、発想が求められるロボットコンテスト「九州夏ロボコン」に出場し、協力して優勝を目指す。また、この九州夏ロボコンへの出場を足掛かりとして、NHK ロボコンへの出場を目指す。

活動目的

山口県では現在、高校生の大学進学率が全国でワースト 2 位という課題に直面している。この問題を解決するためには、地域の子供たちに学びへの興味や進学の可能性を感じてもらうことが不可欠である。私たち山口大学ロボット研究部は、自分たちの「好き」という情熱を原動力に、ロボット製作を通じてこの課題の解決に挑む。

私たちは NHK ロボコンへの出場を目標に活動しているが、それだけでなくその活動を通じて地域社会との絆を深め、地域の皆さんに応援されるチームとして成長することを目指している。

「Just Be Farmers」

代表 甲斐大駆志さん

(知能情報工学科 4 年)



概要

「新長州ファイブ」は、農作業を通して地域との交流を深める学生団体。今年度は 2,000m² に拡大した農地で、かぼちゃの重量記録更新を目指しつつ、安全第一を徹底し、参加者全員が安心して取り組める活動を展開する。

活動目的

農業を通じた宇都市の発展を目的として活動。具体的な目標は、以下の 3 点である。

- ・万博出展を通じた宇都市における農業の魅力の発信、若者による地域貢献モデルの提示。
- ・ワイルドパンチでの活動を通して、新たな販路と地域ブランディングの機会を創出。
- ・収穫物の価値を高め、地域内の資源循環を促進することで、農業に対するポジティブな認識を広める。

上記を通じて、宇都市の農業が抱える「担い手不足」「販路の限定化」といった課題に対し、学生ならではの柔軟な発想と行動力で新しい選択肢を提示することを目指している。

専攻外から挑むエンジニアへの道

応用化学科R4年卒 西津 穂香



【自己紹介】

私は2022年に応用化学科を卒業し、現在は日鉄テックスエンジニアリング株式会社で機械エンジニアとして設計業務に従事しています。プラントエンジニアリング企業として、機械・電気・建設のほか、生産やパーティクルボードなど多様な事業部門を開拓している会社で、私は製鉄所設備の新設や改造案件の見積から、計画、設計、現場調査、製作管理、試運転までの一連の業務を担当しています。

【学生生活】

在学中は、高分子化学研究室に所属し、山吹先生と鬼村先生のご指導のもと、弱塩基による脱保護反応で2種類のポリマーを回収し、再利用可能なロタキサンの合成を目指す研究に取り組みました。学部4年生の1年間のみの活動であり、当時はコロナ禍の影響もあって、十分な成果を上げることはできませんでしたが、研究室の仲間や先生方との交流を通じて多くを学び、充実した学生生活を送ることができました。現在もリクルーター活動で、年に一度、常盤キャンパスを訪れており、変わらない風景に毎回懐かしさを感じています。

【出会い】

学部3年生の夏から、モノづくりに関わる仕事に就きたいという思いで就職活動を始めました。当初は研究開発職に憧れていますが、学部卒では難しいと感じ、化学系にこだ

わらずに幅広い業界を見るようになりました。そんな中、偶然参加した合同企業説明会で、プラント業界に出会いました。目に見えないミクロの化学の世界とは対照的で、スケールの大きな工場を作ることに惹かれ、プラント業界を目指すようになりました。

専攻外からの挑戦だったため、入社後についていけるか、そもそも採用してもらえるか大きな不安がありました。いくつか魅力的な企業に出会いましたが、最終的には福利厚生と研修制度が充実していることから、現在の会社に入社することを決めました。

入社後は、半年間の新人集合研修で座学や実践的なモノづくりを学び、エリア配属後は1年間にわたるOJT研修を通じて設計と施工管理の業務を学びました。2年間の研修を経て、希望していたエンジニアリング事業部に配属され、現在に至ります。入社直後に配属が決まるのではなく、設計と施工管理の両方を経験した上で、自分に合う方を選べる点も魅力だと感じました。一見すると遠回りに思えますが、実際に現場で据付作業を間近に見ることで、施工性を考慮した設計力を身につけることができたと感じています。

【現在の私】

入社後は想像以上に苦労の連続でした。元々物理が苦手だったため、機械工学の基礎である4力にはとても苦戦しています。同期がスムーズに計算や作図をこなす姿を見て、涙が出るほど悔しい思いをすることもありました。それでも、CAD未経験で基礎知識もない状態からスタートし、資格試験合格レベルのスキルを身につけることができました。

また、自分が設計に携わった設備が工事完了した時に大きなやりがいを感じ、初めて自分が設計したモーター駆動部の安全カバーが据え付けられた時の感動を今でもはっきり覚えています。専攻外からの挑戦で多少の不利を感じることはありますが、前向きに考えると大学4年間で培った化学の知識は、他の人にはない私だけの強みです。今後は化学プラントなどの案件で貢献できることと期待しています。

さらに、現在は女性活躍・環境改善WGに所属し、他エリアの女性技術者との交流や意見交換を重ねながら、必要な施策の検討に取り組んでいます。周囲には、困りごとを気軽に相談することができ、要望に耳を傾けて積極的に動いてくださる上司がいて、恵まれた環境にあると感じています。一方で、業界や社内における女性技術者は非常に少なく、差別的な扱いを受けるというわけではないのですが、時折過剰な配慮を感じることがあり、挑戦の機会が制限されているのではないかと不安に思うことがあります。性差による制約が全くないとは言い切れませんが、本当にできないことはごく僅かしかないと信じています。今後もこうした課題に向き合うことが私の使命だと考えています。使命というと少し大げさですが、日常で感じる小さな違和感や困難に対して、素直に声を上げて行動することで、少しでも良い方向に変わっていけば嬉しい、そんな思いです。

【大切にしていること】

私は何かを選ぶときに、損得だけで判断せず、自分で選んだ道を最後までやり抜く「決断」をすることを大切にしています。多様なキャリアが広がり、大転職時代と言われる現代においても、卒業後の進路選択は大きな「決断」と思います。大学院進学や化学系への就

職という選択肢がある中で、新たな世界に挑戦する「決断」をした当時の自分の勇気と覚悟を今では誇りに思っています。これまでの私は、自分の信念だけを頼りにたくさんの「決断」をしてきましたが、多くの方々の支えや励ましのおかげで、今の自分があると実感しています。まだまだ理想の自分には程遠くて苦しくなることが多いですが、いつか恩返しができるように頑張ります。

専攻外に挑戦することは、すぐに成果が得られるものではありませんが、一人前のエンジニアとして認められる日を目指して、着実に努力を重ねていきます。いつか「この道を選んで良かった」と思えるよう、精進してまいります。

【最後に】

私は偶然の出会いと憧れをきっかけに、専攻外に挑戦しました。知識が全くない状態で飛び込んでも、意外と何とかなるものだと感じています。大切なのは、自分の気持ちに素直になり、今やりたいと思うことに勇気をもって挑戦することだと思います。もし苦しくなったときは、別の道に進む選択肢があることも忘れないでいてほしいです。どんな選択にも後悔は付きますが、挑戦しなかった後悔はずっと心に残り続けます。失敗が必ずしも成功に繋がるとは限りませんが、その挑戦に踏み出す勇気と経験はきっと自分の支えになるはずです。

この度、山吹先生より寄稿のご依頼をいただき、この道を選んだ時の思いや今後の展望について考える貴重な機会になりました。素敵なお縁をいただき、心より感謝申し上げます。末筆ながら、皆様のご健康とご多幸をお祈りするとともに、常盤工業会の更なるご発展を心から願っております。

根を張る建築、風を呼ぶまちづくりー今、私が育む感性の場

感性デザイン工学科H12年卒 木村 大吾



山口大学工学部で「感性」と向き合う日々から、私のものづくりは始まりました。学部時代に学んだのは、人の感覚が住まいや都市空間に投影されるとき、その「質」をどう捉えるかという問い合わせでした。大学院では、さらに深く、ものづくりの根底にある人間・土地・材料の関係性を探る道へと進みました。特に、内田文雄教授(現株龍環境計画代表取締役)の研究室における「その土地の風土と、土着の材料、職人の技術とが交わる設計思考」は、私にとって転機となりました。

「木陰を抜けた風の道」をつくろうと沖縄で取り組まれた内田先生の実践、そこには風と光、地の素材、そして地元の技に根ざした設計がありました。建築を単なる形の生成ではなく、「その場の記憶を呼び起こすもの」としてとらえる視線が、私の設計観の奥行きを深めました。例えば、地元下関に戻ったとき、私は単に住宅をつくるのではなく、「既存の暮らし」と「新たな文脈」をつなぐリノベーションに挑みました。これは、土着の技と新しい暮らしの折り合いを探る営みでもあります。

大学院修了後、私は(株)現代計画研究所で実践を通して建築設計の学びを深めました。そこでは感性デザイン工学科で培った「人の感じ方」に加え、都市を構成する構造や予算・設備といった現実課題にも向き合いました。そして、29歳で地元下関に戻り、家業である金剛住機(株)に入社し、住宅設備業としての専門性をベースに、暮らしの器としての「家」

を、まちづくりの視点で捉え直しました。古民家の再生、水辺空間での社会実験、移住促進と暮らしのデザインーこれらすべては、「その土地の素材・技・風景」を起点とする活動でした。

現在、私は住宅・設備事業を展開する傍ら、カイキョーエリアマネジメント(株)、ゆとりお不動産(株)を通じて、下関市中心部の水辺・商業エリア再生にも携わっています。ここでも内田先生の「地元素材と地域技術を活かしながら、建築空間が風を宿すように設計する」という思想が息づいています。例えば、中心市街地において「開かれた通り」「人と水との接点」「地元材の意匠」が折り重なるプロジェクトを手がける中で、私は「何がこの場にふさわしい問いかけか」を常に己に問うています。

振り返れば、学びの日々からずっと変わらないのは、「人の感覚を起点に、場所と素材と時間をつなぐ」という設計の根っこです。感性デザイン工学科で培った問いかけも、土着的建築の思考も、そして地域での実践も、互いに補完しあってきました。地域で生きる木材や職人の技術に光を当て、既存住宅を「風と人とつながる場」に変える。そのプロセスこそが、私がこの下関という場で育みたい建築・まちづくりの姿です。

これからも私は、感性を磨き、風土に根を張り、地域と共に場をつくっていきます。そしてその設計が、暮らし一つ一つの「当たり前」をほんの少し豊かにすることを願って、日々を重ねていこうと思います。年男の48歳、これから来る還暦までの1周12年間をいかに自分が楽しむのか、自分自身を客観的に見つめながら楽しんでいきたいと思います。

〈地域同窓会だより〉

宇部地区合同同窓会

令和7年度総会報告

赤川 佳史（工化 61 年卒）

令和7年度標記総会を7月26日（土）17時より国際ホテル宇部「翡翠の間」で開催いたしました。今回の総会開催にあたっては、約800名の会員に個別案内を行い、常盤工業会ホームページでも総会の案内を行っていました。当日は、来賓として常盤工業会会长の古林隆司様（工化49）と話題提供者として、山根 隆様（UBE マシナリー株・機械 H2）をお迎えし、参加者は総勢32名となりました。

総会では、会長の赤川佳史（工化S61）の開会あいさつに続き、常盤工業会会长の古林様よりご挨拶をいただきました。続いて、令和6年度事業報告及び決算報告並びに会計監査報告が行われ無事に承認されました。次に令和7年度は役員改選年度に当たるため、任期満了に伴う役員改選が提案され、これも無事に承認されました。会長に赤川佳史、庶務幹事は小林剛士氏（感性 H15）、会計幹事は竹田 稔氏（応化 H18）が選任されました。続いて令和7年度の事業計画及び予算案についても全会一致で承認されました。

総会終了後は、「話題提供」で山根 隆様（UBE マシナリー株・ダイカスト事業本部取締役執行役員）より、『自動車生産の変革 ギガキャストについて』と題してお話を賜りました。自動車の製造の骨幹にかかる技術変革の推移について、非常に興味深いお話を伺うことができました。

18時から同会場にて懇親会に移りました。副会長の森重吉朗氏（土木 53）の乾杯のご挨拶で始まり、会場は大いに盛り上がりまし

た。楽しく歓談したのち、前会長の倉田茂夫氏（工化 56）の中締めの挨拶の後、再会を約して閉会しました。

ここ2年間の総会において、各幹事、事業所幹事および年次当番幹事の皆様のご協力で若い会員の参加が増えたことは非常に喜ばしいことです。今後も諸先輩をはじめ、より多くの会員の皆さんに出席いただけるよう宇部地区合同同窓会の一層の活性化に取り組んでいきたいと考えています。



土木建設系関西地区同窓会

令和7年度総会報告

野畠 正明（土木 54 年卒）

9月13日（土）15時より、大阪市北区の中央電気俱楽部にて、来賓に吉武 勇先生（社会建設工学科教授・社建 H8）をお迎えし、標記総会を開催しました。総会の開催にあたり、会員275名に案内状を送付し、職域幹事（10の民間企業／地方公共団体毎に配置）による呼びかけ、来賓の吉武先生からも研究室の卒業生へ連絡をしていただきました。さらに常盤工業会のホームページでも案内をしていただき、総勢35名（うち2名女性会員）の皆様方の出席がありました。

総会では、会長の野畠正明（土木54）の開会挨拶に続き、「令和7年度役員・幹事の選出」と「令和6年度活動報告」を、岩城博昭会計幹事から「令和6年度会計報告」を行い、いずれも全会一致で承認されました。

総会議事終了後、来賓の吉武先生から、「インフラメンテナンスに向けた山口大学工学部の取り組み」と題して、ご講演をいただきました。また、令和8年4月の情報学部新設・工学部再編について大学の最新情報もご紹介いただきました。ご講演の概要は以下の通りです。

1. ME 山口養成講座とは

吉武先生がセンター長を務めておられる「山口大学工学部附属社会基盤マネジメント教育研究センター」が主催して、インフラメンテナンス技術者の養成を行っている。

2. 講座の目的

インフラ老朽化の加速度的進行、維持管理にかかる財源・人材不足という社会背景を受け、産官学が協働してインフラ再生技術者を育成する。

3. 講座の内容と登録

橋梁やトンネルの維持管理について、座学と実習からなる7日間28コマの講座を受講し、修了認定試験に合格した者が、メンテナンスエキスパート山口（ME山口）として国土交通省登録資格を得ることができる。2025年1月時点の認定試験合格者総数は282名である。

4. ME 山口のインセンティブ

山口県が発注する業務の総合評価競争入札において、配置技術者評価の対象となる。

講演後、吉武勇先生を囲んで出席者全員の記念写真を撮影し、中央電気俱楽部3階の大食堂にて懇親会に移りました。和田安澄夫様（土木36）の乾杯の挨拶に始まり大いに盛り上がりました。楽しく歓談の後、若手代表の柳木大河様（社建R4）の中締めの挨拶後、再会を約して閉会しました。

この度の総会を契機とし、これからも諸先輩をはじめ、より多くの現役会員や女性会員に出席いただけるよう、年次幹事や職域幹事の力を借りながら、関西土木の一層の活性化に取り組んでいきたいと思っております。



電気系関西地区同窓会

LINE・Webを活用し世代間交流の場を目指す

藤井 宝久（電気 51年卒）

2025年9月27日（土）、標記の総会を大阪市内で開催しました。ご来賓として、山田洋明先生（電気電子工学科准教授・システムH17）にお越しいただきました。

第一部では、前会長の加賀赳寛さん（電気 44）より、「関西地区電気系同窓会活動の活性化の取り組み」についてお話しいただきました。グループLINEのメンバーは33名になり、会員の輪が広がりつつあることと、Webサイトで活動状況を発信していることを共有しました。

次に山田先生より、「研究室の取り組み紹介と工学部や学生の現状」についてご講演いただきました。専門分野であるパワーエレクトロニクスの概要や、企業との共同研究の状況、優れた博士の育成を目的とした飛び級制度など大学、学生の今に関するお話を拝聴しました。

第二部の懇親会では、元会長の畠田 稔さん（電気 40）に、「業種・世代を超えてコミュニケーションできる場に参加することは社会生活に役立つ」とこの会の有用性を語っていただきました。さらに新メンバーに登壇いただき、自己紹介をしてもらいました。

第三部は場所を変え、大阪の繁華街「北新地」にある山口料理の店でさらに親睦を深めました。カラオケでは山口県の歌や山口大学学生歌が飛び出し、大いに盛り上がりました。

参加者からは、「多くの先輩からいろいろなお話を聞くことができ、楽しく過ごすことができました。次の機会には社内で同窓生に声をかけてみます。」等の心強い言葉をいただきました。

本年度の参加者数は昨年を上回り総勢22

名でした。今回、来賓の山田先生より研究室出身の卒業生に声をかけていただいたこともあって、卒業後5年以内の若手3名を含む9名に新たに参加いただいたことは非常に喜ばしいことでした。

これからもグループLINEでのつながりを広げ、関西地区電気系ホームページを充実させ、大学の先生との連携を強化して、世代・業種を超えた交流の輪を広げていきたいと思います。今後の同窓会活動のさらなる活性化に向け、会員皆様のご支援、ご協力をよろしくお願ひいたします。

【関西地区電気系ホームページのご案内】

右QRコードよりアクセス
いただけます。



先生と若手会員を囲み談笑しました



出席者の集合写真

機械系関西地区同窓会

令和7年度総会報告

白庄司恭之（機械 H10 年卒）

9月27日(土)に、中央電気倶楽部にて標記総会を開催いたしました。コロナ前の2019年以来の開催となりました。一般会員・新卒者の方一部の方併せて381名に開催の案内を出し、122名から返信をいただきました。案内の送付から開催までが1ヶ月という短い期間だったにも関わらず、多くの返信をいただきましたが、当日、参加いただけたのは9名で、創成科学研究所機械工学専攻を令和5年に修了されたゲストの方1名と合わせて計10名となりました。

総会では、会計報告を行い、新役員（会長・会計担当・監査）について了承をいただきました。このほか、常盤工業会定時総会の報告をはじめ、工学部のトピックスの紹介などを行いました。スクリーンにて工学部のホームページを皆で見ており、過去の学部長の変遷、履歴が映ったところで、諸先輩を中心

話が盛り上りました。

総会後、懇親会ではそれぞれ近況を語る人、若い会員の話を楽しそうに聞いている人、皆とても楽しく過ごせたようでした。コロナ禍より中断していましたが、本年開催することができ、本当によかったです。

私が会長になって初めて開催した総会ですが、今回は、全会員に案内をしたことでの赤字となってしまいました。今後はハガキを用いた案内は正会員のみとし、他の会員についてはメールで案内をすることとしました。



会員だより短信

菅原 富夫（機械 23） 年に1回の健康診断は異常なし。読書、散歩等で毎日の健康管理をしています。

大塚 泰司（工化 34） 高齢ながら何とか日々を過ごしています。

梅崎 邦彦（電気 43） 八十路を迎えたがまだ元気です。昨年の秋には友人と車で自宅の松阪から、松江、出雲、津和野、萩、山口、宇部、下関を旅しました。工学部の前も通りましたがあまりの変わりように感激しました。工学部裏の常盤台もずいぶんと変わったようですし、もう一度訪ねたいと思っています。

林 弘昭（電子 H6） 令和7年8月より3回目の海外出向となりました。過去にはタイに4年間（製造と品質）、中国深圳に5年間（製造）出向しておりますが、今回は5年ぶりの中国出向となりました。天津工場に約3年間の予定で生産技術と安全を担当します。がんばります！

〈クラス会・同窓会だより〉

工化51年卒業

同窓会報告

工化 51 年卒 池田 成彦

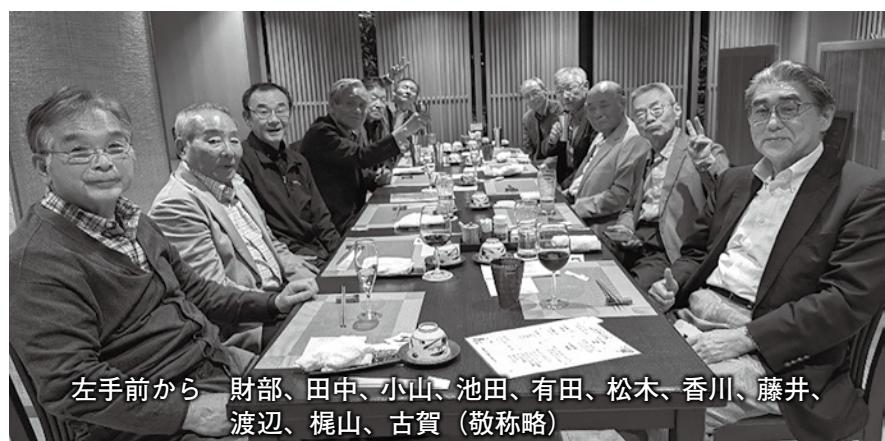
去る令和 7 年 4 月 12 日（土）に、10 年ぶりとなる同期会を国際ホテル宇部の「日本料理 吉長」で開催しました。この同窓会のきっかけは、2 年前に開催した S 51 年卒関東同期会の席上で、10 年前に宇部で開催した同窓会を懐かしむ声からでした。そこでぜひもう一度宇部で開催しようということになり、準備に入りました。

当初最も困ったのは、久しぶりの同期会のため、個人的に連絡を取り合っている限られた同窓生しか連絡先がわからないことででした。そこで、常盤工業会事務局に工化 51 年卒の卒業者リストの作成を依頼し、それをベースに調査を試みました。リストでは住所不明者が 5 名あり、記載されているメールアドレスは以前所属していた勤務先のものが多く、既に定年退職の年齢を過ぎていたことから、そのほとんどが使えない状態でした。そのため、関東同期会や関西同期会を中心に、個人的にメールアドレスの照会をお願いしました。一方、住所のわかる同窓生には往復はがきを送り、同窓会開催の案を連絡すると同時に、返信ハガキでメールアドレスや携帯の番号を記載して返信してもらうことを実施しました。当初 5 名いた住所不明者のうち、最終的に連絡先不明者は 2 名になりました。また、往復葉書で返信のなかった方が 3 名あ

りましたが、生存者 28 名中 23 名との連絡はメールで行えるようになりました。このような状況で、同窓生の連絡先の調査に半年以上かかり、同窓会の案内状が送付できたのは、年が変わり令和 7 年の 1 月初旬でした。

結果として、同窓会に参加した同期メンバーは、山口県在住者 5 名（内 3 名は宇部市在住）、関東同期会から 3 名、大阪、広島、福岡各 1 名の計 11 名でした。久しぶりの再会で何人かは最初すぐには顔と名前が一致しない場面もありましたが、会が進むにつれて、学生時代の懐かしい話や、各人の今の生活ぶりなどで盛り上がり、時間延長した懇親会もあつという間に終わってしまいました。「吉長」での一次会終了後は、国際ホテルに宿泊した同窓生の部屋で二次会、みんな学生時代に戻った感覚で、時間の経つのも忘れて、夜遅くまでワイワイガヤガヤとなんだか少し若返ったのではと感じられる時を過ごせました。

同窓会では、次の同窓会を 2027 年の 2 月か 3 月頃に湯田温泉でやろうという話で盛り上りました。今回は、体調を崩して参加がかなわなかった同期も数名おり、後期高齢者の仲間入りを控えた今、同期会で会えることを生き甲斐にし、湯田温泉での再会を楽しみにそれぞれ帰路につきました。



左手前から 財部、田中、小山、池田、有田、松木、香川、藤井、渡辺、梶山、古賀（敬称略）

— 会員の訃報 —

令和7年6月26日以降判明分（令和7年12月15日現在）
ご逝去を悼み、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

旧教員	平井	隆	令和7年5月27日	工化39	瀬川	和宏	令和7年6月22日
鉱機19	丸山	晃	平成26年11月8日	土木39	真砂	鴻	令和7年4月20日
鉱機20	高橋	隆二	(死亡日不明)	工化40	大羽	修	(死亡日不明)
工化20	池畠	調一	令和6年3月6日	土木40	小阪	昭南	令和7年4月3日
機教22	光田	覚	平成25年9月4日	土木40	中谷	保夫	令和4年6月13日
機械24	野末	和彦	令和6年9月2日	工化41	新井	正人	令和5年1月22日
機械24	古屋	博教	平成27年9月	工化42	小川	徹也	令和6年11月24日
採鉱24	新谷	隆男	令和7年7月27日	機械43	水城	正	令和7年4月19日
工化24	小河	靖博	令和2年7月	資源43	坂本	豊	令和6年2月
工化24	佐藤	敦幸	令和7年5月11日	土木43	重富	碩夫	令和5年6月19日
土木26	高取	功	令和6年9月30日	工化46	瀬戸	克己	令和7年7月
機械28	山本	治郎	令和5年2月	土木46	柿本	修	令和7年6月
機械29	石川	正秀	令和7年4月1日	土木46	原田	寛	令和7年12月10日
鉱山29	河野	通雄	令和6年10月	生産46	片山	進	令和7年9月13日
鉱山31	奥田	訓	令和7年6月28日	工化47	福田	満	令和5年12月
鉱山31	藤村	光俊	令和7年4月1日	土木47	中村	徹夫	令和7年4月28日
工化32	末元	亘	令和7年9月19日	土木47	古屋	憲二	令和7年3月22日
機械34	伊藤	修三	令和7年3月9日	工化48	仁井	博紀	令和2年12月
土木34	山仲	司人	令和7年7月14日	土木48	峰	優博	令和5年10月
機械35	大野	恒義	平成30年	土木49	岡部	益雄	令和7年1月
機械35	高田	公隆	令和6年11月24日	工化51	式田	雄二	令和7年5月17日
機械35	古子	要	令和7年3月7日	土木54	田中	保弘	令和5年1月17日
土木36	梶川	修	令和7年2月8日	資源56	福田	純	令和7年4月
工化37	梶谷	巖	令和7年4月5日	生産56	倉谷	健司	令和6年
土木37	栗田	洋介	令和7年5月17日	資源57	南里	隆平	令和元年6月1日
土木37	守屋	研治	令和7年7月21日	資源62	菊池	剛志	令和7年6月23日
電気37	馬場	協二	令和7年1月28日	化工63	川崎	勉	令和6年12月2日
機械38	佐方	長門	令和7年2月15日	工化H2	鶴岡	尚志	令和7年3月7日
機械38	林	慶治	(死亡日不明)	知BH10	吉岡	秀樹	令和6年9月15日
工化38	久保	晴哉	令和7年2月17日	機材H10	貞廣大三郎		令和5年12月28日

告 知 板

最新情報につきましては常盤工業会ホームページで確認されるか、事務局にお問合せください。

関西本部月例会のご案内

(毎月第2金曜日ですが都合で変更する場合もあります)

令和8年の開催日：

1/9、2/13、3/13、4/3、5/8、6/18、7/3、8/7、9/4、10/9、11/13、12/4

時 間：午後5時30分～8時30分

場 所：中央電気俱楽部 2F 201号室

大阪市北区堂島浜2-1-25 TEL06-6345-6351

JR 北新地駅より7分、地下鉄四つ橋線梅田駅より6分
(堂島地下街南詰C-93番出口を出る)

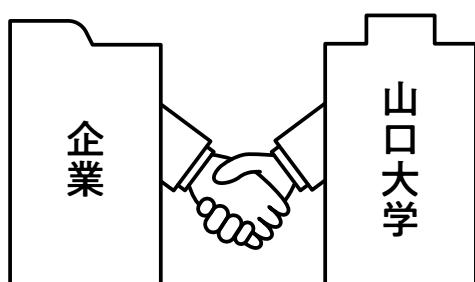
会 費：4,000円程度

関西本部月例会は昭和52年に始めて48年目に入り、令和7年6月で500回を迎えました。これからも続けて参りますので多数ご参加下さいますようお願い申し上げます。他地区の方も出張等でご来阪の折には、ぜひお立ち寄り下さい。

関西本部会長・事務局 高村 和男
事務局 小金 健

地域の皆様、企業の皆様、ご相談お待ちしています！

山口大学では、「大学研究推進機構」を設置し、民間企業等との産学連携活動により、新製品の開発や現状の課題解決に取り組んでいます。



産学連携の例

- 研究者・専門家の紹介
- 技術的なアドバイス・指導・相談
- 評価・分析
- 共用機器の利用

相談無料



相談窓口 山口大学 産学公連携・研究推進センター

TEL: 0836-85-9961

E-mail: yuic@yamaguchi-u.ac.jp

HP: <https://kenkyu.yamaguchi-u.ac.jp/sangaku/>

告知板

「常盤」原稿募集！

会員の皆様より広く「常盤」の原稿を募集しています。

投稿締切日

「常盤」97号（令和8年8月発行）への投稿 令和8年5月10日まで

「常盤」98号（令和9年2月発行）への投稿 令和8年10月10日まで

投稿にあたっての注意事項

- 原稿と写真を tokiwa@bc.wakwak.com にお送りください。
写真は元画像（jpeg等）を別途添付して送ってください。
- タイトル・写真も含めて1頁以内におさまるように原稿をお書きください。
- 「会員だより」（短信）は、同封の「ハガキ」通信欄を利用できます。
- 投稿者に文章の修正をお願いする場合や誌面の都合で変更、割愛することがあります。
- 編集委員会の責任で原稿の修正をさせていただく場合があります。
- WEB版にも掲載いたします。

【お問合せ】常盤工業会事務局 TEL (0836) 32-7599

住所を変更された方へ



「現住所及びE-mailアドレス」 についてお知らせください！



毎回、会誌を送るたびに、転居先不明等でかなりの部数の会誌が返送されます。現住所や勤務先等変更となった方は、必ずご連絡をお願いいたします。

メール・ホームページ「登録フォーム」

- メールが利用できる方は、なるべくメールでご連絡をお願いいたします。
- 常盤工業会のホームページ（TOPページ>会員サービス>住所等変更登録フォーム>会員異動登録フォームをクリック、もしくは右記QRコード）より手続きができますのでご利用ください。



ハガキ 現住所や勤務先、メールアドレスが変更となった方は、同封のハガキに記入され投函ください。



※登録されている情報（現住所、勤務先、メールアドレス）に変更のない方はハガキの返送は必要ありません。

常盤工業会事務局 連絡先 〒755-0039 山口県宇部市東梶返 1-10-8
TEL 0836-32-7599
E-mail tokiwa@bc.wakwak.com

—会費納入のお願い—

常盤工業会で行っている母校の支援、在学生の支援、地域同窓会交流活動、会員相互の交流活動、学術交流活動等、常盤工業会の事業のすべては皆様方に納入していただいている会費で運営されております。

是非、常盤工業会の活動にご理解を賜り、常盤工業会の活動がより活発で充実したものになりますよう皆様方の積極的なご支援をお願い申し上げます。

会員(学生は除く)の皆様の会費納入方法

- 年会費： 3,000円 年会費は何年分でも前納できます。
- 10年分一括前納：25,000円 10年分の会費を一括納入することにより割安となります。
- 60歳以上の会員の終身会費
60歳以上の会員が年齢に応じて一定額の会費を一括納入することで、以後の会費納入は不要となります。
 - 70歳以上：20,000円
 - 65歳以上：30,000円
 - 60歳以上：40,000円

- 会費の免除：80歳以上の会員で直近の10年間滞りなく会費を納入している場合、ご本人が申告することにより会費免除の適用を受けることができます。

[払込手数料に関する注記]

本会が作成している常盤工業会会費専用の払込取扱票（郵便局）を利用して払込を行う場合の手数料は本会負担となります。この場合において、現金で払込を行う際の加算料金については会員様の負担となりますのでご注意ください。

会員各位の会費納入状況の確認について

会員皆様の会費納入状況は、「常盤」送付時の宛名ラベルに表示されています。

会費納入状況により表記の仕方が異なりますので以下をご参照ください。

ラベル表記例① 終身会費または会費免除適用

終身会費納入済または会費免除適用の方ですので、「会費納入は不要」という表示です。

ラベル表記例② 会費 次回 令和7年度分より

「次回は令和7年度分の会費よりお願いします」という表示です。

会員個々人の納入状況により異なる表示となります。

注記

※宛名ラベルは、会誌送付時より一定期間前のデータに基づいて作成されています。作成後に会費を納入された場合は、宛名ラベル面の表記に反映されない場合があります。ご了承ください。

※在学生（博士後期課程除く）については、会費に関する表記はありません。

リスクリソースに興味のある社会人・ 企業の皆様、ご注目ください！

社会人を対象とした データサイエンス学び直しのための 教育プログラムのご案内

データサイエンスに関するスキルアップを目指しませんか？

AI、IoT、ビッグデータの進展に伴い、企業活動においてもそれらの先端的技術の利用が求められる中、内外のデータを迅速かつ高度に分析・解析することで、マーケティングの強化や生産性の向上をはじめ、研究開発の推進につなげるデータサイエンスの活用が強く求められています。企業におけるデータサイエンスの活用を推進することで、企業の技術力・研究開発力を強化し、次世代産業の推進に資するイノベーション創出につなげることを目的とし、講座を開講しています。

社会人の学び直しのための教育プログラムとは？

山口大学 情報・データ科学教育センターでは、社会人の方を対象に、完全オンラインで受講可能な学び直しのための講座を開講しています。

・令和7年度に開講した講座：「データサイエンス技術マスター講座」

データサイエンス技術の基礎として統計学や機械学習を学べる講座を開講しました。データサイエンス分野で使われるPython言語を用いたプログラミング演習も行い、データサイエンスへの理解を総合的に深めることを目指した講座です。プログラミングにあまり馴染みのない方にも安心して受講していただけるよう、受講に必要なPython言語を学ぶ回も実施しました。

◆ データサイエンス学び直しのための教育プログラムに興味がある方・企業様へ

新しい講座の案内は、山口大学 情報・データ科学教育センターのホームページに掲載します。

山口大学のホームページやSNSでも情報を発信しますので、下記のQRコードからぜひご登録ください。

お問い合わせ

山口大学 情報・データ科学教育センター
〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1
[TEL] 083-933-5032
[E-mail] ga110@yamaguchi-u.ac.jp
[HP] <https://www.dsc.yamaguchi-u.ac.jp>

#各種ホームページはこちらから



情報・データ科学
教育センター



山口大学

SNSのリンクは、山口大学
ホームページの下部にあります！



生成AIの登場からわずか数年、驚くべきスピードで社会が変化しているのを実感しています。文章や画像の生成といった目に見える技術だけでなく、産業界では設計や生産の自動化、医療現場では診断や創薬の支援、そして教育現場においても学びのあり方そのもののを変える試みが進んでいます。AIやデータ活用はもはや一部の専門分野に限られたものではなく、社会全体を貫く共通の基盤となりつつあります。

このような時代の大きな流れの中で、山口大学工学部も令和8年度から新たな体制へと歩みを進めます。学科の枠を統合し、学びをより横断的で柔軟なものへ再編するとともに、新たに情報学部が誕生します。これにより工学と情報学という二つの柱を通じて、技術革新と社会の変化に応える教育・研究の場を築いていくことになります。母校がこうした大きな節目を迎えることは、同窓生にとっても誇らしいことであり、あたたかく見守つていただければ幸いです。

一方で、機械工学科の卒業生として感じる

のは、この数年で学生時代にご指導いただいた恩師にあたる多くの先生方が定年退職を迎えたこと、また近く定年を迎えるという現実です。長く学科を支えてくださった心強い先輩方のご退職は大きな節目であり、残る教員としては、その後を担う覚悟と責任の重さに身が引き締まる思いです。もちろん、新しい教員も次々に加わり、新体制の中で新しい風も吹き始めています。卒業生の皆様には、ぜひ気軽に母校を訪ねていただき、新たな常盤キャンパスを見ていただければと思います。また、新体制となった常盤キャンパスの様子は、本誌でも折に触れてご紹介できればと考えています。ぜひ誌面からも母校の姿を感じ取っていただければ幸いです。

最後に「常盤」96号にご寄稿いただいた皆様、そして本誌を手に取ってくださった皆様に心より感謝申し上げます。これからも変わらぬご支援を賜りますようよろしくお願ひ申し上げます。

(院機械H17 森田 実)

「常盤」編集委員長：河村 圭
(知能情報工学科)

編集委員

森田 実 (機械工学科)
大中 臨 (社会建設工学科)
山吹 一大 (応用化学科)
山田 洋明 (電気電子工学科)
藤田 悠介 (知能情報工学科)
小林 剛士 (感性デザイン工学科)
田中 一宏 (循環環境工学科)

常盤 96号

令和8年2月6日発行
発行 一般社団法人 常盤工業会
編集 『常盤』編集委員会
〒755-0039 宇部市東梶返1-10-8
TEL (0836) 32-7599
FAX (0836) 22-7285
E-mail tokiwa@bc.wakwak.com
<https://tokiwa-k.sakura.ne.jp/>
払込口座 01550-5-25085
印刷 株式会社ぎじろくセンター



山口大学



工学部・情報学部特設サイトのご案内

山口大学工学部ホームページにて、2026年4月に開設する新たな工学部と情報学部の特設サイトを公開しています。工学部のTOPページよりアクセスいただくか、右記特設サイトQRコードよりアクセスください。



メールアドレスをご連絡ください

常盤工業会から、会員の皆様に向けて情報発信を行うにあたり、メールアドレスをお知らせいただきたく存じます。すでにご登録いただいている方につきましても、変更等により届かないケースが増えてきていることから、現在ご使用のメールアドレスについて今一度お知らせいただけますと幸いです。



山口大学ドメインのものや、勤務先メールアドレスは、卒業後や退職後に届かなくなるケースが多いため、その他のメールアドレスをお知らせください。

ご連絡方法について

1. 現住所・勤務先とあわせてお知らせいただく場合

常盤工業会ホームページの
「会員サービス」>「住所等変更登録フォーム」より
お知らせください。
右記QRコードからフォームへアクセス可能です。

住所等変更
登録フォーム
QRコード



2. メールアドレスのみお知らせいただく場合

現住所・勤務先等に変更はなく、メールアドレスのみ
お知らせご希望の場合は、下記いずれかでご連絡をお願いいたします。

① 問合せフォームよりご連絡

常盤工業会ホームページの
「会員サービス」>「常盤工業会に関する問合せ
フォーム」よりお知らせください。
右記QRコードからフォームへアクセス可能です。

問合せフォーム
QRコード



② 事務局メールアドレスへ直接ご連絡

- 下記項目をあわせてお知らせください。
- ・氏名
 - ・卒科・卒年（在学生は所属学科名・入学年）
 - ・新規メールアドレス

送信先▶ 常盤工業会事務局／tokiwa@bc.wakwak.com